文化

沈黙に向き合う
沖縄戦 聞き取り47年
〈24〉

石原 昌家

非難覚悟で真実解明
沖縄戦を考える会
平和教育本も出版　歪曲や捏造、現状正す

沖縄戦を考える会が、資料館の展示改善作業として資料収集や戦争体験の証言を得るため、各地で聞き取り調査を重ねてきた成果は、資料館展示に直接反映させると同時に出版活動もしてきた。当初は、沖縄県教職員組合那覇支部との共著の形で『沖縄戦と平和教育』（1978年1月）というタイトルで発刊した。平和祈念資料館も沖縄戦研究も、平和教育の一環だという位置づけだった。

調査研究が深められたので、改訂版として83年8月、『沖縄戦をみつめて―日米両軍のはざまに生きる』というタイトルで沖縄戦を考える会が単独で出版していった。いずれも、資料館展示計画委員会の6人が執筆を担当した。

1980年前後から修学旅行生などの「戦跡基地めぐり」がブームになってきたので、「戦跡と資料館」を案内するガイドに、その本は重宝されることになった。

沖縄戦を考える会が県教職員組合那覇支部と共著で初出版した「沖縄戦と平和教育」

「戦傷病者戦没者遺族等援護法」に被害住民がからめとられ、沖縄戦の真実（実相）が歪曲、捏造されている現状を正す役目をし、殉国美談調で「英霊」を讃え、皇軍賛美している戦跡観光バスガイドのシナリオに対置するものでもあった。したがって、自分たちのシナリオに疑問を抱いていたバスガイドのなかにも「考える会」の問題提起に賛同するひとたちが現れた。

私が最初に接することになった戦跡観光バスのガイド指導員は、いまや参議院議員として活躍している糸数慶子さんだった。出会った1979年当時は、東陽バス会社に所属していた。アメリカ高等弁務官の就任式の宣誓で「最後の高等弁務官でありますように」と述べたことで有名な、牧師の平良修さんから石原と会うように勧められたということだった。「考える会」のメンバーはそれぞれ「観光コースにない戦跡」を「にわかガイド」することによって、ガイドさんたちに影響を及ぼしていった（戦跡ガイドについては、改めて述べる）。

80年前後は、国内戦場を想定した「有事法制」制定の動きが急速化しつつあり、教科書記述において沖縄戦の史実が歪曲されつつあった時期とも重なっていたので、沖縄戦を考える会の存在は重みを増していった。

「守り神」

連載の9回から16回目までに記してきた「伊是名島虐殺事件」「糸数アブチラガマの住民殺害事件」という沖縄戦の「タブー破り」の内容を網羅した『虐殺の島―皇軍と臣民の末路』（晩聲社）を、私は78年1月に発刊した。その際、「沖縄戦を考える会運営委員会」に「『虐殺の島』に寄せて」という一文を添えてもらった。それは「タブー破り」をして、その重圧に喘いでいた私にとっては、平常心を保つためのまるで「守り神」のような存在で、なんども読み返したものである。その一部を引用したい。

「体験者の頑固な沈黙が作業（注・聞き取り調査）をはばむ場合が多い。傷口の深さに思い出すのもいやだという感情が強く、また、援護金や個人のプライバシーにかかわることをおそれて沈黙を守る場合もある。地域によっては真相を語ることが共同体のタブーになっている場合もある。

だから、われわれの調査活動には、つねに『なぜいまさら古傷をあばくのか』といった非難が向けられるのを覚悟しなければならない。われわれがそれを覚悟であえて内実に踏みこんでいかねばならないのは、沖縄戦の特質がその沈黙のなかに存在するからである。

（中略）

それゆえ、ひとつの事件の全体像を解明していくにも、多角的に、実証的に、その内部構造にまで追求のメスを加えていかなければならない。それなしには事件の本質を見誤り、結果的には戦争美談にすりかえられていく危険性がつねに伏在しているのである。戦争体験の真実を解明する作業というのは、かくのごとく、根気と勇気と、そして決して感傷によって眼を曇らさない強じんな実証精神を要するものである。調査者だけでなく真実を証明していく体験者の勇気もまた必要とされる。

以上のような立場に立って沖縄戦研究に取り組みつつあるわが会にとって今回の石原氏の労作は意義深い収穫のひとつである。」（同書245ページ）

自然休眠

1989年6月23日、「ひめゆり平和祈念資料館」が開館した。その数年前、沖縄戦を考える会の副会長の一人、中山良彦さんが総合プロデューサーとしての実績を評価され、「ひめゆり資料館」の企画・展示内容・執筆等を委託された。したがって、沖縄県立平和祈念資料館の展示企画委員会のメンバーに加えて、高校教諭（平良宗潤、吉浜忍さん）や沖国大の歴史家・仲地哲夫さん、琉球大学の田港朝昭さんらも加わり、ホテルの一室で長時間展示企画を練ったり、展示解説文をチェックしあったりしていった。

沖縄戦を考える会は、振り返ってみると、この資料館づくりを最後に組織的活動は、解散宣言することなく「自然休眠」に入っている。

「考える会」は、総会を開いて活動方針に沿った毎年の活動成果を共有しあうということはしていない。「考える会」の取り組むべき問題が山積していて、それぞれが、おのおのの現場での対応に追われ、「考える会」に持ち寄るという余裕がなかった（この執筆にあたって、副会長だった安仁屋政昭さんに電話で確認したら、その通りと断言された）。私自身は、勤務していた沖縄国際大学のゼミ学生と共にぼう大な時間を沖縄戦の被災調査などさまざまなテーマで戦争体験者に向き合い、戦争体験の研究を深化させていった。

（次回は9月中旬掲載）